

注文したグラスが二人の前に並んだ。

晶子が徹の耳元で囁く。

「ところで、わたくし、ボウリングしてると感じちゃうんです。今日みたいにスリリングな勝負すると、もう今のアソコは濡れてビショびしよ」

軽いからかいが、口調の中にあった。

「それはいけないなあ。僕も興奮したけど、脚の間のケモノはおとなしいですよ」
前を向いて口になると、すぐに晶子の耳元に囁く。

「でも、晶子さんが遊んでくれたら大暴れしてくれますよ」

「遊ばしていただけるのかしら？」

晶子が今度は前を向いて言う。

徹がまた晶子に囁く。

「もちろん、喜んで。触っても、舐めても、しゃぶっていただいてもいいですよ」

「ホントに？ それは嬉しいかぎりですわ」

「では、お礼にわたくしの濡れ具合確かめて下さいな。わたくし今パンティーはいてないんです」

耳元で囁く。

さすがに、この言葉には驚いた。

晶子は続けて言う。

「右手の人差し指を出してくださいさる？」

カウンターに人差し指だけ伸ばした右手を出すと、晶子にはわかen左手でその右手首をつかんだ。

そして、さりげなく左右をうかがってストールを回した。徹の正面に脚を広げて股間を向ける。膝に置いたスーツの上着を右手で、両太腿の左前にずらした。床につかない程度に垂らして目隠しにする。つかんだ右手首を自分の股間の奥に導いていった。

この間、晶子は徹の目を見つめたまま微笑みを見せている。徹も応じて笑顔を見せる。

不自然に垂らしたスーツを注視されなければ、男女がおたがいの顔を見つめて、笑顔で話をしているとしか見えないはずだ。なかなかスリリングな体験である。

人差し指が、晶子のスカートの中に導かれる。右手が蒸れた温かい湿気に包まれた。やがて、指先がいきなり粘性の液体に触れたことを伝えてくれる。右手人差し指の先が、蜜液のついた淫部のどこかに触れているのだ。晶子の言葉に嘘はない。間違いなくパンティーを穿いていない。

晶子はずかんだ手首を操って、淫部のあちらこちらを人差し指に触らせた。蜜液に濡れた恥毛も指先に感じる。ついに人差し指が小淫唇の肉ビラに触れた。その二枚の淫唇の隙間に挿し導かれる。中の泉に浸った。湧き出る晶子の蜜液が指先に当たって心地良い。淫靡で温かい蜜液に指先がふやけていくようだ。

「ステキなお礼の指のおもてなしをいただいて嬉しいです。ありがとうございます」

「そんな風に言っていたらと光栄ですわ」

「堪能しましたよ。鹿島さんの蜜を味わいたかったので、僕の指を解放して下さい」

「『味わう』って何をなされるの?」

晶子は握った手首を放すと自由にしてくれた。早速、晶子の股間から右手人差し指を引き抜いた。自分の目の前にして見つめる。見事に指の根元まで、晶子のねっとりした蜜液にまみれている。

晶子もさすがに少し顔を赤らめて徹の様子をうかがっていた。

徹は突然その指を目の前にあるバーボンソーダのグラスの中に入れた。グラスの中をその指でなめらかにかき混ぜる。カランカランと氷が当たると小さな音がした。

「えっ、あっ」

晶子はその次の人差し指の動きに、驚きの声を漏らした。

やがてグラスから引き抜くと、眺めてみる。親指を曲げつけてすぐ離すと細い糸を引いた。トロ蜜がのっている。そしてその自分の右手人差し指を舐めしゃぶった。きれいに全て舐め取ってしまう。

舐めた指についた蜜液は無味のはずだから、粘り気を除けばバーボンの味しかなかった。だがやはり少し味わいが変わっていた。コクが増した気がする。

「鹿島さんの蜜の味はバーボンに合いますね。コクが増えて美味しかった」

晶子は、目を丸くし、予想外の行動に返す言葉を失っている。やっと言葉を返した。

「そう聞いていただけで光栄ですわ」

徹はいきなり晶子の右手首を左手でつかみ、微笑みかけながら口にした。

「僕のケモノは、ここではお見せできませんが触って確かめて下さい」

晶子は徹の意図に気づき、微笑みを返す。

晶子の右手に自分の股間を触らせた。

触られたりつかまれたり、晶子にケモノの大きさと硬さを確かめられている。

「わたくしのお汁に反応して下さってるのわかりましたわ」

晶子がまた囁く。

「僕にあなたの今晚のお供をさせていただけませんか？」

「ぜひ、お願いします。嬉しいわ。ステキな夜を二人で過ごせそうですわね」

二人は目の前のグラスをそれぞれ飲み干すとバーを出た。

手をつないで、エレベータに向かう。

5

ホテルの八階、晶子の泊まる部屋に、足を踏み入れた。

部屋の内装は、都心の有名ホテルにふさわしく、豪華に過ぎずシックで上品だ。

照明が程よい光度で、シングルルームの落ち着いた雰囲気を出している。

ベッドのサイズはゆったりと大きい。

先にベッドの前に立った晶子が声をかける。

「徹さんとお呼びしていいかしら？」

「もちろん、僕も晶子さんとお呼びしていいですか」

「いいですわよ。そうだ、二人だけで遊ぶんだから、もう余計なもの脱いじゃいませよ」

晶子は、履いていたハイヒールを脱ぎ、手に持っていた薄手のジャケットを椅子に掛けた。まずドレスシャツの前ボタンを外し始める。脱ぎ去ると、鮮やかな刺繍が施されたネイビーのブラだけを纏った上半身が露わになった。見事な美熟女の肢体の上部が目に入る。ブラは豊満な両乳房をわずかにしか隠さないランジェリーデザインだ。

そのブラが外されると、晶子の素晴らしく巨大な乳房が露わになった。ティアドロップ型をしている。解放された乳房が左右にわずかに広がり垂れながらも、上下左右に巨大な丸みを帯びていた。美しさとボリュームが圧倒的だ。絶品と言える両乳房だ。

明るすぎない室内照明が乳房の表面に艶やかな光沢を与え、豊かな乳房の曲線に深い陰影を落とす。その鮮やかさに息を呑む。乳輪も乳首も濃いセピア色の茶色みを帯びたピンクだ。ともにかなり大きい。房の巨大さを彩るにふさわしい。

脱いだドレスシャツと外したブラを椅子のジャケットに重ねて掛ける。スカートで脱いで、そのシャツの上に重ねて掛けた。

下半身も露わになって、美しい砂時計型の肢体全てが目に入る。ウエストは見事にくびれている。ヒップラインは優美な曲線を描き、美しい細く長い脚が映えていた。

身に着けているのはランジェリー、黒いガーターベルトと肌色がわずかに透ける黒いストッキングだけである。当然パンティーは穿いていない。

徹の大好物である。

「わたくしの身体をご覧になっていただいて、徹さんのオチンチン大きくなるかしら？」

「当然です。硬く大きくなってますよ。いま証拠をお見せします」

この程度の女体の挑発にたじろぐことはない。

ただちにデッキシューズを脱ぎ、ポロシャツを脱ぐと、チノパン、トランクスを脱いだ。履いているのは靴下だけだ。

肉棒は隆々と勃起し、怒張を見せている。

「ステキだわ。ご挨拶してもいいかしら？」

「いや、シャワーを二人で浴びて、挨拶がてらにコイツと遊んでやって下さい」

「そうね。いいアイデアね」

「その前に、お近づきのキスをしませんか」

「喜んで」

徹はベッドの前の晶子に歩み寄ると両手で抱きしめた。

部屋の大きな窓の前である。ほとんど裸の男女の、淫らで情熱的なまぐあいの攻防が始まる。その姿を、見事な都会の夜景が見届ける。

徹も晶子も両手を背中に回し、強く抱きしめた。見事に巨大な乳房が自分の胸板に押し潰される。直接自分の肌に当たる、柔らかくしっとりとした感触に酔いしれながら、唇を重ねた。しばらくおたがいの柔らかい唇を舐め合う。晶子の唇に甘いルージュを味わった。

最初のピチュという吸着音がしてから、すぐにチュプ、じゅるり……と濃密な音になる。

甘美な戦いは、ジャブの応酬から、本格的なパンチの応酬に変わったのだ。

まず、晶子の舌が徹の口内に侵入し、温かい粘膜の上を這い回った。次いで、舌に激しくねっとり絡みつく。

晶子の舌には、柔らかいが芯も感じる独特の触感があった。その舌筋には静かな圧力が宿っている。舞い踊る晶子の舌使いは、徹の舌を巧みに支配しようとするかのようだ。

今まで味わった中でも、トップクラスの刺激的な舌絡みだ。

(いかに、油断するとこの舌で自分の快感神経を乗っ取られる)

晶子の呼吸と舌の圧に、晶子の意図が表れている。

負けじと徹の舌はスローテンポの、やはりねっとりだが柔らかい舌使いで応戦した。『剛』に対しては『柔』で対抗するのがセオリーだ。受けに回っているように見せかけて晶子の舌の強い攻めを包み込み、逆に快感になるような感触を送り返す。勝負を五分に戻すのだ。

数分もの間、二人はディープキスをむさぼりあった。

たがいの舌は攻防を続け、おたがい疲れを感じているが、同時に快感中枢を最高に刺激している。その証拠に、キスの間に晶子の股間を指で探れば、蜜液がすでに太腿まで濡らし始めていた。晶子もまた、徹の股間を触診するように触り握り、大きさと硬さを確かめる。

やがて、たがいが自ずと唇を放した。

「徹さん、キスがお上手ね。舌が疲れるほどのキスは久しぶり。それに偵察もお上手だわ。ねばねばお汁が出てとまらなくなってる。知られちゃったわね」

「僕の舌も疲れるほど晶子さんのベロを味わえました。最高級のディープキスです。格別に美味しかったですよ。晶子さんこそ事前調査は完璧ですね。ケモノは仕上がってます」

「そう、ビジネスではカタログ見ただけでは買いませんもの。続きはシャワーを浴びながらじっくりお品を見せて下さいな」